チャペル週報

No.18

2013 .10.14～10.18

秋季宗教運動特集号

あなたがたも知っているとおり、
彼らにもあなたがたにも同じ主人が天におられ、
人を分け隔てなさらないのです。

（エフェソの信徒への手紙6：9）

西宮上ケ原キャンパス　ランバス記念礼拝堂

関西学院宗教センター

☆チャペル・スケジュール☆

時間 10：35～11：05　　場所 各学部チャペル

10月14日(月) 神　中　道　基　夫（神学部教授）
経　English Music Chapel　Timothy Dale Boyle（宣教師）
人　音楽チャペル　ゴスペルクワイアP.O.V.
聖和　聖書物語「どうやって祈るの」

10月15日(火) 院　小　片　　聡（神学研究科M２）
神　柳　澤　田　実（神学部准教授）
文　Andreas Rusterholz（宗教主事）
社　上ケ原ハビタット
法　栗　林　輝　夫（宗教主事）
経　上ケ原ハビタット
商　音楽チャペル　聖歌隊
国　ASEAN Project報告　参加学生のみなさん
聖和　讃美歌指導　広瀬康夫と New Directions
総　日下部　さつき（総合政策学部４年）

10月16日(水) 神　水　口　優　明（大阪ハリストス正教会司祭）
社　動詞シリーズ「悩む」⑥　Ruth M. Grubel（院長・社会学部教授）
法　English Chapel　Christian Morimoto Hermansen（宣教師）
経　舟　木　　譲（宗教主事）
商　音楽チャペル　ゴスペルクワイアP.O.V.
国　關　谷　武　司（国際学部教授）
聖和「育ちあい」吉　新　ば　ら（キリスト教教育・保育研究センター）
理　前　川　　裕（宗教主事）
総　村　瀬　義　史（宗教主事）

10月17日(木) 大学合同チャペル「総主題：“グローバル”な世界に生きる」10:20～11:20
西宮上ケ原キャンパス　会場：B号館101号教室
「真のグローバル人材とは何か－関学生に期待したいこと」神余 隆博（副学長）
西宮聖和キャンパス　会場：メアリー・イザベラ・ランバスチャペル
「世界に愛を届けた家族」Ruth M. Grubel（院長）
神戸三田キャンパス　会場：Ⅵ号館101号教室
「台所の中の“グローバル”」上　内　鏡　子（神戸イエス団教会牧師）

10月18日(金) 大学合同チャペル「総主題：“グローバル”な世界に生きる」10:20～11:20
西宮上ケ原キャンパス　会場：B号館101号教室
「台所の中の“グローバル”」上　内　鏡　子（神戸イエス団教会牧師）
西宮聖和キャンパス　会場：メアリー・イザベラ・ランバスチャペル
「わかち合う共同体を求めて」山　本　俊　正（院長補佐）
神戸三田キャンパス　会場：Ⅵ号館101号教室
「グローバル社会とみえざる力」西　本　昌　二（総合政策学部教授）

◇ランバス早天祈祷会　毎金曜日　8：20～8：40　ランバス記念礼拝堂（上ケ原）
10月17日（木）宗教運動のために　小　川　晃　司（宗教活動委員会伝道部長）
10月18日（金）宣教師の働きのために　Christian Morimoto Hermansen（宣教師）

The Family that Delivered Love to the World

Ruth M. Grubel

We are now beginning the 125th year since Kwansei Gakuin's birth in Harada-no-Mori near Kobe. However, in 1854, before Kwansei Gakuin was even imagined, a young couple decided to leave their home in America, not to find better jobs, freedom from oppression, or a more comfortable life, but to share their faith and their love with people living on the other side of the earth. It is hard to imagine how much courage it took to leave family, friends, and familiar surroundings to brave a long and dangerous ocean voyage to live among people with totally different languages and cultures. However, this is what James and Mary Lambuth did soon after they were married.

The world of the mid-nineteenth century was shrinking quickly. Trade within countries and between them began to grow, and there was an increasing cultural exchange between America and Europe. Many Christian organizations began to look outside their own countries to address problems of poverty and lack of education or medical care, as well as to "spread the good news" of Christianity. Of course, some of these missionary efforts reflected a sense of superiority – going out to save the poor, ignorant, unbelievers – but others were rooted in a genuine love for their fellow human beings in faraway lands.

In this era, James and Mary Lambuth arrived in Shanghai, a very international port city, and two months later, their first child, Walter, was born. Growing up in Shanghai with his American parents, it is no wonder that during his life, Walter would feel comfortable working with people from many different cultures. In spite of the difficulties of international travel, he and his family made strong connections with people in various countries. In Japan, their American and Japanese colleagues collaborated in a multitude of projects, including the establishment of Kwansei Gakuin in 1889. Kobe in those days must have felt like a very international city too, with a harbor to welcome ships from around the world.

Although we assume that we are now in the era of "globalization," this process of interaction among people from different countries, regions, and cultures began thousands of years ago. The important point, both then and now, is how we interact with those who are different from ourselves. We can learn from the example shown by the Lambuth family, to base our encounters on an attitude of love and respect for others. (Chancellor)

留学とグローバル人材そして社交性について

神　余　隆　博

2013年秋季宗教運動の総主題は「“グローバル”な世界に生きる」であるので、それに関して感じたことを述べてみたい。

9月29日の日経新聞ウエブ版は、全国139の大学の学長に行ったアンケートの結果として、半数近くの学長が10年後に海外への留学が３割以上増えると予想していると報じている。グローバル化の時代にあって海外留学は何のためにするのだろうか。これに対する私の答えは、若者がこれまでの自分中心の生活から、人のため、世のためになることを考える成熟した人間になるきっかけをつかむのが留学であるというものである。同年代の世界の若者に触れて日本と世界のためにできることは何かを見出してくること、地球社会の一員であること、そしてその前に日本人であることを再認識し、自分に課せられた責任がいかに重いか、何が自分に足りないかが分かるようになる機会を与えてくれるのが海外留学である。

今はやりのグローバル人材とは、そのような使命感を自ら掴み取って日本と世界に奉仕しようとする啓発された人のことを言うのであり、言葉やコミュニケーション能力に長けただけの人間を意味するものではない。

正論を吐くのは簡単である。正しいことを主張するのは、少しの勇気があればできる。しかし、正論だけでこの世の中が動いているわけではない。正論を吐くと同時にそれを貫徹させるための何倍もの努力と説得が必要である。それでも説得ができなければ、また別の手を考える、その積み重ねと多くの失敗を経て初めて物事が動くということを、留学の体験の中から掴んでもらいたいと思う。

そしてそのような説得や交渉がうまくできるためには、言語能力と他人との交わりの仕方を若いときから訓練しておく必要がある。本来社交というのは人間が社会的動物として存在し始めた時代から存在していた。あらゆる人間活動の根本にあるのは社交であり、政治も経済も外交も社交の一形態ということになる。社交は、一定のルール（プロトコール）とスタイル（なりふりを構うこと）とを身につける必要があるので、若い時から癖をつけておかなければならない。社交には約束事があり、素養と訓練が必要だ。社交のできない人間は意識の能動性を捨ててしまったつまらない粗野な存在になる。

碩学の山崎正和氏が言うように、社交を重んじる風潮の醸成は価値が多元化する21世紀の国際社会にとって益々重要性を帯びてくるだろう。

関西学院の目指す世界市民もまず、立派な日本人となるところから始まる。真の勇気と社交性を留学を通じて涵養し、おもいやりと高潔さを身にまとった世界市民に育ってほしい。

（副学長）

「アジアの中の『日本』、日本の中の『アジア』」

上　内　鏡　子

今のわたしがあるのは、学生時代の様々な学びと経験が土台となっています。徹底的に価値の転換を迫られたからです。キリスト教信仰とは、天を仰ぐ事だと勘違いしていた頃、「実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ」と気づかされ、ガーンと頭を殴られたような衝撃を受けました。

高校生の頃から「国際交流」ということに興味を持ち、外国旅行や外国で働くことに限りない夢を描いていました。当時のわたしにとって、外国はアメリカであり、ヨーロッパでした。

大学２年生の夏、あるきっかけで、フィリピンより出稼ぎに来ている女性たちに出会いました。ちょうど同年代でした。「英語の練習」が頭をよぎりました。しかし、美しく着飾り人生経験抱負な彼女たちは、仕事に対しての罪責の念に押しつぶされそうになりながら、悲しみと懺悔の祈りをささげるのでした。

「好きでもないのに、どうして日本まで来て仕事をするのか？」そのような疑問と、耳から離れない悲しみの祈りの声。自分自身の未熟さとフィリピン女性たちの背後にある深刻な何かを見つめたいと感じ、学びが始まりました。彼女たちの信仰を支える日曜ミサのお手伝い、講演会や勉強会、外国人への相談室の立ち上げなど、わたしなりに真剣でした。

そこで見えてきたことは、日本とアジア諸国の不均衡な経済格差や政治力の違いなど、一女性の人生が国際的な問題と深くつながっていることでした。また、現在の女性の痛みが、女性差別や植民地支配といった過去の痛みへ遡ることのできる歴史的証しであることも無視できませんでした。

その頃わたしの中には、外資系の会社で働く夢は消えていました。

ある日、ボランティア活動の指導者が「君らはアジア、アジアと言って、外ばかり向いているけれど、日本もアジアだよ。日本は西欧ではない。そして、日本の中のアジアにもしっかりと目を向けてほしい。」その頃から、在日韓国朝鮮人の多く住む地域でのボランティア活動へと自分の関心が広がりました。日本もアジアだとすれば、日本の課題はアジアの課題でもあるのです。

この視点に立った時、フィリピン女性たちの涙の祈りと在日韓国朝鮮人のオモニの叫びが共鳴して、日本人女性であるわたしに問いかけているのだと気づきました。立つべきところは、この女性たちとわたしの間に立っておられるイエス・キリストの十字架でした。神の国は、わたしたちのただ中にありうると知った瞬間でした。

（神戸イエス団教会牧師）

「わかちあい」の共同体を求めて

山　本　俊　正

1990年代にＩＴ革命と呼ばれる世界のグローバル化が始まりました。21世紀に入ると、このグローバル化は、さらに急速に進みました。政治、経済、科学の分野ばかりではなく、私たちの日常生活においても、大多数の人が、その便利さを享受し、謳歌するようになっています。インターネットを通じて、私たちは瞬時に世界と繋がることが可能になりました。すばらしいことです。しかし、これらの便利さがある一方、グローバル化の負の側面も指摘されています。

明治以降、日本の近代化の大きな特色の一つは、資本主義的な市場経済を形成することでした。この大きな目標を達成するためには、私たちがより科学的に思考し、合理的な精神の持ち主となることが期待されました。しかし、この目的の促進にとって大きな壁となっていたのは、農村や山村における共同体の存在でした。またその共同体を構成する基本的な原理でした。伝統的な社会においては、伝統的な価値観と倫理があり、それに従って生活していればよかったのです。人々は同じ共同体の中で助け合って生きていました。そこには安定した人間関係があり、社会における秩序も倫理も安定していました。しかし、近代化のプロセスは、また、その帰結としての経済のグローバル化は、伝統的共同体を「遅れた」社会として解体し、格差社会を生み出し、人と人との、関係性を希薄にしてしまったのではないでしょうか。

キリスト教の初期の共同体では、「一人として持ち物を自分のものだと言う者はなく、すべてを共有していた」（使徒言行録４：32）という聖書の記述があります。礼拝をする前には、空腹のまま神に祈る者がいないように、皆が一緒に食べてから礼拝することも行なわれていたようです。これをアガペ・ミール（Agape Meal=愛餐）と呼んでいました。これに近似した「わかちあい」の伝統は、形を変えて、日本だけでなく、世界の様々なところで、共同体の原理として実践されてきました。今、私たちが、“グローバル”な世界に生きる意味を「わかちあい」の共同体の視点から考えてみたいと思います。

（院長補佐）

グローバル社会と見えざる力

西　本　昌　二

コロンブスの時代から始まったとされる“グローバル化”には多大な恩恵がある。発展途上国においても、教育、医療などの分野で進展がみられ、新たな仕事につき、所得が向上した人も多い。他方，“グローバル化”には、負の側面も多い。先進国の文化や価値観が世界的な規範を支配し、多くの国で古き良き伝統のもとでの精神的な安定は失われつつある。

日本でも経済的観点から、“グローバル化”に乗り遅れるな、とか、“ガラパゴス化”した日本を建て直す、など言われている。大学教育の中では、海外留学の奨励、外国語習得がさらに重要視されている。

私は44年前大学卒業後、数か月の就職経験を後に、海外に飛び出した一人だ。主な理由は、国際的な職場で自己を発揮したい、という願望が強かったからだ。私にとって職業とは、自己成長、鍛錬の場であると同時に自分の信じる価値観を実践する機会と信じていた。

あれから38年ほど、国連開発計画（UNDP）など４つの国際機関で社会インフラ整備、能力開発などの支援活動に従事した。はたして、私の初心は実現され、満足な成果を上げられたのかは、わからない。一つ確信をもって言えることは、優秀な人と一緒に働けば、謙譲の大切さがわかり、自分の非力を改善したいと思うし、大組織を動かすのも一人ひとりの力の結合ということだ。

本学で教職について、スクールモットーの、"Mastery for Service "を考えるとき、私の過去のいわゆる“グローバル”な仕事をするにあたって私を導いてくれた理念、見えざる力、があった、と強く感じる。

人間は生物の一つである以上、本来自己中心なものだ。しかし、他の動物と違って人間の行動には、他利的、“全体のためには自分を犠牲にする”という部分も多々ある。そこには、利己的な考えをコントロールして、真、善、美、愛に近づき、それを実践するよう努力したい、という願望がある。関学のスクールモットーはそれを励ますメッセージなのだ。真、善、美、愛はすなわち、我々の能力を超えた力、すなわち、“神”の望むものなのだ。この理念は時代や場所を超えて、普遍的に存在すると思う。

関学は建学125周年を迎え、その創立者の望み、ビジョンを大切に思い出し、考えることが必要だ。これを我々がよく理解し、内部化し、日々の生活の糧とするとき、“グローバル”な世界で自分は如何に生きるのか？ という問いに、答えがおのずと見えてくるものと確信する。

（総合政策学部教授）

●第194回ランバス演奏会のご案内

リコーダー・アンサンブル「レアール」コンサート

と　き：10月24日（木）17：30開演
ところ：ランバス記念礼拝堂（上ケ原）
主　催：関西学院宗教センター　＜入場無料＞

「レアール」は本学応援団総部吹奏楽部の卒業生が中心となって1997年に結成されたアンサンブルです。リコーダーだけでなくチェンバロ、パンフルートなど多彩な編成で様々な時代、ジャンルの音楽に取り組んでいます。

●大阪梅田キャンパスチャペル

阪急梅田駅から徒歩すぐ、アプローズタワー14階の大阪梅田キャンパスでは、授業期間中の毎週金曜日にチャペルアワーを開催しています。どなたでも参加できますのでどうぞお越しください。

10月18日（金）、25日（金）
18：00～18：20　1405教室

●ランバスチャペルアワー

学生たちが企画するチャペルです。次回の予定は以下のとおりです。

10月22日（火）10：35～11：05　ランバス記念礼拝堂（上ケ原）
【テーマ】あなたの国とわたしの国をつなぐ希望
“Hope bridging your country and my country”
International Chapel Hour at Lambuth Chapel on Tuesday 22nd October.
Come join us to sing a hymn in your native tongue and hear the Word of God spoken in various languages. You will find a hope in this campus of our Kwansei Gakuin University.

●夕べの祈りatランバス～テゼの音楽とともに～

ろうそくの光を灯して、テゼの歌を歌いながら、皆でこころ静かに過ごす夕の祈りのひととき。どなたでもご参加ください。

第2回　11月7日（木）18：30～20：00
第3回　1月9日（木）18：30～20：00
ところ：ランバス記念礼拝堂（上ケ原）
主　催：夕べの祈り準備会（学生有志）
協　力：関西学院宗教活動委員会

●リトリートat千刈　～テゼ共同体のブラザーを迎えて～

フランスのテゼ共同体からブラザー・ギランを講師に迎えて、1泊2日のリトリート（修養会・黙想会）を開催します。一日数回のテゼの音楽を用いた共同の祈りを中心に、ブラザーのお話、グループでの話し合い、個々の黙想の時間などを通して、それぞれが命を深呼吸させる日々。関西学院が大切にしてきた建学のスピリットに、体験的にふれる機会です。ぜひご参加ください。

と　き：11月30日（土）～12月1日（日）
ところ：関西学院千刈キャンプ
主　催：関西学院宗教活動委員会
申込み・問合せ：宗教センター（吉岡記念館事務室）
※申込みは神戸三田・聖和各キャンパスでも可

●使用済み切手収集にご協力ください

本学では日本キリスト教海外医療協力会（JOCS）切手部の活動に協力し、使用済み切手を収集しています。通常切手も対象としていますのでどうぞ吉岡記念館常設の回収箱にお届けください。

●盲導犬育成のためご協力お願いします

関西学院宗教活動委員会は、目の不自由な方々の社会参加促進を願い、社会福祉法人「日本ライトハウス」の募金活動に協力しています。吉岡記念館事務室はじめ各学部カウンターに募金箱を用意しておりますので皆様の温かいご協力をお願いいたします。